

# 今市開析扇状地の地理学的考察

定 方 和 子

## 第一章 調査地域概説

## 第二章 今市開析扇状地の地形

## 第三章 表層地質

- I 七本桜パミス、今市パミスの分布及びその厚さについて
- II 表層地質の分類

## 第四章 今市開析扇状地の土地利用

- I 既存農家の場合
- II 戦後の開拓部落の場合
- III 土地利用上の問題点
- IV 今市開析扇状地の土地利用の将来

今市開析扇状地は東京から150Km、足尾山塊の東北に大谷川が作った古い扇状地で、北関東ローム層の鍵層となる七本桜、今市両パミスが典型的に分布している。歴史的にはこの地域は日光東照宮の存在による影響が大きく、扇頂部にはかつての今市の宿（現在の今市市街）が位置し、そこから放射状に日光、例幣使、会津西、日光北の各街道が扇状地を走っている。そこで卒論では開析扇状地をおおむねパミス層及び黒ボク土壌に注目した地形と表層地質（特に今市パミスと七本桜パミス層の分布と層厚を扱う）その観点からみた地下水や灌漑用水及び農業土地利用が主題となり、これに日光東照宮の存在に影響された今市の開発の歴史をからませた。

本地域の地形は宇都宮を中心とする北関東全体の地形の一部として、北関東ローム層との関係から区分された宝積寺、宝木、田原の各地形面をあてはめてみた。扇状地面は扇状地礫層の土にローム層と七本桜パミスや今市パミスなどのパミス層が堆積し、表面には新しい腐植火山灰土壌である黒ボク土壌がおおっているため、地下水水面も深く地味もよくない。しかもこの地域は山地に接した海拔350m位の準高冷地で、いろいろな点から農業には不利な地域である。そのため江戸時代後期から灌漑用水路が作られ、畑作から水稲作への転換がなされてきたが、この傾向は現在でも強くほとんどの農家の平均1.2ha位の耕地は、大部分が水田で、畑は自家用野菜を作るために少し残されているのみである。戦後入植した開拓部落のほとんどはこのような既存農家の農業経営にみ

なっていて、水田化を目標にしているが、萱場地区のみは酪農経営をめざし県下でも優秀な成績をあげている。萱場地区は他の地区にくらべ有利な条件もそなわっているのだが、開拓部落における2つの農業経営が今後の今市開析扇状地の農業土地利用の指針をあらわしているように思われる。自然条件などからは酪農経営の方が望ましいし、萱場のように成功している所もあるが、現在水稲作は技術的にも商業的にも安全で、酪農のように資本の必要とか大きな失敗の危険性などが無いので、この地域にもっとも適した農業経営としてさらにその重要性を強めていくように思われる。

## 柏尾川流域の地理学的考察

高田和枝

調査地域は多摩丘陵南端部を刻む柏尾川流域とし、西に藤沢市に接し南に鎌倉市を含む横浜市の南部に位置する。この地域は丘陵内の谷底平野に水田が作られ、丘陵斜面や崖下の微高地には集落が見られる田園地帯であったが、京浜工業地帯と湘南地方の中間地帯にあるため、最近では住宅地化や工業地化の現象が著しく、一般住宅が増しているのは勿論であるが、水田地帯には主に工場が立並び、また丘陵上にはアパート群がそびえるようになった。このような最近の急激な変貌をただ変化しただけで眺めるだけでなく、卒論には調査地域を一つの単位として、その変貌をできるだけ網羅し、数量的にとらえると共に変貌によって発生した問題の発見を試みて、この地域の性格を出してみたいと思った。

卒論の内容構成は次の通りである。

### 第一章 柏尾川流域の概説

- ①位置・②自然・③産業・④集落と交通の発展

### 第二章 柏尾川流域の地形

- ①地形区分・②柏尾川・③沖積層

### 第三章 柏尾川低地の工業地化

- ①都市化・②工場の進出・③近郊農村の変動

### 第四章 水の害

- ①柏尾川の洪水・②洪水の特性・③水利用・④洪水の原因

### 第五章 まとめ